

「肉とワインが美味しいですよ。」今年の春から初夏にかけてブエノスアイレスでのアーティスト・イン・レジデンスを終えて帰国された大崎さんのことばに背中を押されてわたしが同地を訪れたのは、9月上旬のことでした。わたしの滞在先は、中心街にある劇場を改築した書店として有名なAteneo Grand Splendid近くのホテルで、2箇所ある学会の会場もそこから歩いて30分以内のところがありましたから、滞在したといっても、街中のほんの一角を5日間ほどグルグルしていたにすぎません。

この程度の経験しか持たないわたしが大崎さんの滞在制作について語るのはいかにも申し訳ないのですが、それでもなぜ大崎さんがこの地を選んだのかについては、腑に落ちるものがありました。それは、「記憶」です。大崎さんは、作品集<untitled album photo>(2018)にこう記していました。

「唯一無比な時間や記憶、過ぎていく時間の流れと記憶の在りかをモチーフに、私たちが生きる現在について考えています。」

たしかにブエノスアイレスという街は、中心街の美しい街並み・言葉・そして行き交う人の多くが白人であるように見えることも含め、あらゆるものがヨーロッパの記憶とともに生きている、そんなふうに見えます。

しかしそんな旅行者的な(そして実際には誤った)感慨ではなく、大崎さんが取り組まれた「記憶」は、日本からブエノスアイレスに移民された方のそれです。しかもそれは、現地でのインタビューが日系三世、四世の方(年齢的には20代から40代くらいの方)を中心に行われたことからわかるように、過去にどうであったかということよりも、「私たちが生きる現在」、さらには未来について考えるために選ばれたテーマでした。今を生きる若い人たちが、自分たちのルーツについてどのように考え、現在さまざまな問題を抱えているなかで、これからどのように生きていこうとしているのか、それを、三世・四世としてブエノスアイレスに暮らしている普通の人たちの、普段通りの言葉の中から聞き取ることが試みられたのです。

これは二つの点で重要であると思います。ひとつはそれが、SNSなどによるインスタントな「今」の共有と真逆であるように見えるという点です。大崎さんは、たくさんの人とじかに会い、思い出の写真を見せていただきながら、いろいろお話をうかがったそうです。移民のみなさんがどんなコミュニティを形成していたのか、日本人としてどんな規範の態度を求められていたのか、現在はどんな仕事をしているのか、教育制度はどのように作られてきたのか…過去から現在に至るさまざまなことがら、淡々と語られたと言います。

こんなふうに時間をかけて、遠く離れたところにいる、もしかしたら自分たちと同じルーツを有しているかもしれない同世代の人たちと、何かを新しく共有したり、つくりはじめたりしようとする。大崎さんの作品が、一見静的でありながら、過去にも、現在にも、未来にも、またそれらのいくつかが入り混じったようにも見える、複層的な作品であるのにはこうした理由があるのだ、とあらためて気づかされました。

もうひとつは、それが「今」を描き出すことに奔走するジャーナリスティックなアートのあり方、アートというよりもむしろプレゼンテーションと化したあり方とは違うたたずまいを呈示していることです。綿密な聞き取りを重ねながら、しかし大崎さんの作品が調査報告書のごときドキュメントと並ぶことはありません。それはあくまでひとつの作品としての力によって、わたしたちの心を動かすのです。

もうひとつ、腑に落ちたことがあります。それは、大崎さんもわたしも、ブエノスアイレスに日本の「未来」を見た、ということ。ただその内実は、わたしと大崎さんとは違っているかもしれません。旅行者のわたしにとっては、デモが頻発し大規模な交通規制が続いても、格差が放置されたまま、富める地域だけが過去の栄華の記憶のなかに生き、夜更けから始まる美味なるディナーを楽しんでいる…その姿が、未来の日本に重なったのです。大崎さんは違う未来を見たはず。それが何かは、展示会場で尋ねてみたいと思います。そこは「記憶」と「未来」が現在に交錯する場所となっていることでしょう。

ブエノスアイレスの思い出は、当地で毎日いただいたマルベック種のワインとともにあります。日本のコンビニでも探していればときどきお目にかかります。いまもそのワインをいただきながら、楽しかった短い日々を思い出しています。大崎さんには、あらためてお礼を申し上げなければなりません。ありがとうございました。

「真反対の双子と、たまたまについて」

僕がなぜブエノスアイレスに行く事になったのか。

それは本当に「たまたま」だ。前年にブエノスアイレスにレジデンスで滞在していた友人のアーティストKさんと、帰国後と一緒にご飯を食べながら土産話を聞き、「いいなあ、アルゼンチンに行きたいなあ」と大いに盛り上がった。そして数ヶ月後、Kさんから「大崎さん、ブエノスでのレジデンス決まりましたよ」と電話がかかってきたのだ。正直、びっくりである。その場のノリがほとんどで、何も考えていなかったのだが「オッケー、いつ？」と返事をした。

2019年4月半ばから約一ヶ月間、アルゼンチンのブエノスアイレスにアーティスト・イン・レジデンスで滞在してきた。日本から見て地球の真反対に位置するアルゼンチンは、僕の感覚においても真反対の国だ。到着した現地は秋。強く感じる日差しは、日向と日陰の温度差が大きく、色のはっきりと見えるように強い。アルゼンチンは多民族国家で、アメリカ合衆国に次いで多くの移民を受け入れてきた国だ。ブエノスアイレスのヨーロッパのような街並みは、多くの移民団が目指した裕福な国であったという過去の繁栄の記憶を彷彿とさせる。『母をたずねて三千里』というアニメを知っている方も多いと思うが、このアニメはイタリアの少年が、出稼ぎに行ってしまった母をアルゼンチンへ探し訪ねる物語だ。しかし現在の経済は、これまでにデフォルトを8回も経験し、今日のアルゼンチンペソの急落は9回目のデフォルトを予感させる勢いである。デモやストライキも頻繁におこり、地下鉄や電車は日常的によく止まる。だが、彼らの日常はラテン気質もあって、いたって楽しそうだ。レジデンスのスタジオ近くの公園では、毎週末に大きなダンスパーティーが開かれて、多くの人々が夜遅くまで楽しんでた。いろいろと日本では考えられない事態である。

今回の滞在では、日系移民の三世、四世の同世代や若い方々に、日常の記憶や思い出についてアルバム写真などを見せていただいたり、インタビューをしたりと見聞きしてきた。理由は「未来」について考えたかったからだ。来年の東京オリンピック以降への漠然とした不安感や、近年頻発する自然災害。自分の国に明るいイメージが思い浮かばない中で、たまたま決まった滞在中、たまたま出会う風景と、たまたま出会った同世代や若い方々の思い出や生活について見聞きする。地球の反対で、そんな普通なことから未来について考えてみたかった。

移民の国で「移民」として世代を繋げる日系の方々、自らのアイデンティティーについて強く意識し、そこで生きている。幾人かの人々にインタビューをする中で、日系四世の「双子」に出会った。事前に双子と聞いていたが、彼女たちの性格や格好は真反対で、本当に双子なのか？という第一印象と、インタビューを通じて知った彼女たちの生い立ちから、僕は様々なことを考える。

かつて経済学者のサイモン・クズネッツが『世界には4種類の国がある。先進国と途上国そして、日本とアルゼンチンだ』と語った国。途上国から先進国となった日本と、先進国から途上国となったアルゼンチン。そこでの滞在中を通じて「アルゼンチンは日本の未来ではないか」ということを感じた。上手く言語化できないのだが今回のリサーチで彼らと話をしたことは、どこか未来に繋がる気がする。

僕は記憶や思い出について、ユニークピースでありマルチプルだと考えている。これらは個人にとって間違いなく唯一のものであるのだが、他者の記憶に触れることは、自分自身と繋がって転写していくようにも感じる。このなんともいえない時空を超えて繋がっていく感覚は、確かに存在している。日本とアルゼンチンという真反対の場所で取材した彼らの記憶や思い出。そして僕がこの滞在中で感じたことの記憶や思い出。その出会いはたまたまであり必然である。時空は繋がっていくのだ。

そんなことをあれこれ考えながら帰国して直ぐ、秋庭さんにお会いする事になった。そこで「学会でブエノスアイレスに行く事になったのですが、どんな所ですか？」と尋ねられた。二度目のびっくりである。

僕が感じた繋がりの時空は、現実世界でも繋がっていくらしい。